

就職、AO・推薦試験に向けて

森下治生

学校では、この教科書が使い始められる頃にはもう、就職試験対策、AO・推薦試験対策などの取り組みが始められていることであろう。高校国語教師にとって頭の痛い季節の始まりである。就職だけでなく、大学・専門学校の入試がAO入試を始め、多様化・早期化している現在、受験指導は多忙を極める。

「先生、志望動機、書いたんだけど見てくれないかな」

「先生、面接の仕方が分からないんだけど……」

全ての生徒に一人一人丁寧に対応してあげたいとは思っても、物理的に困難なのは明らかだ。

そんな迷いや不安を抱えた三年生たちに、国語の授業の中で、いったい何ができるだろうか。いや何をすべきなのか。

1 資料編 表現の実践「志望動機・自己PRを書く」「面接を受ける」の活用

巻末の〈資料編〉では、実際に入社・入学試験を受けるための「小論文」や「志望動機」「自己PR」の書き方、「面接」の方法が具体的に説明され、一斉授業の中での授業方法が提案されている。これは単なる受験メソッドではない。社会に出るにしても、入学試験を受けるにしても、生徒は確固とした明確な意志をもっていることは少ない。むしろ、「志望動機」や「自己PR」を明文化させようという作業の中で、自分を

発見、というよりも創りあげて行くのである。何か志望のきっかけとなるものはなかったか（過去の自分）。そのために今何ができているか（現在の自分）。そのことによって何を学び、どのように社会に貢献していこうとしているのか（未来の自分）。この、過去―現在―未来という一貫した軸を意識化することによって、生徒は初めて自己の志望を明確化することができる。あるいはそれをまとめる過程で、現在の自分に欠落しているものが何であり、何をなすべきかを理解する。

人は、まず目的を定めてから行動に移るより、むしろ行動のプロセスの中で、目的を明確化していくということのほうが多いのではないか。志望先を決定してから志望動機を書き、面接の練習をするよりも、もっと早い段階から仮想の受験先を想定して準備に入るほうが、志望先の明確化と、それを通した目標の確立に結びつくだろう。〈資料編〉の作業は、受験準備というだけでなく、自己創造のプロセスなのだ。

2 その他の教材群との関連

また、文章を書くことに習熟していない生徒は、「ウォーミングアップ」の書写で文章を書くことに慣れるとよいだろう。また、評論「人はなぜ働くのか」では「働く」ことの意味がダイレクトに問われる。小説では太田光、角田光代といった若い作家の作品を中心に、定番の「山月記」などを通して「生きる」ことの意味が深く追究される。多彩な教材の読解が〈資料編〉での自己発見・創造と結びつくことで、生徒にとって学校での「国語」の最後になるであろうこの『現代文A』の授業が、将来へと向けた確実な一歩となってくれることを願う。

（もりしたはるお・元東京都立文京高等学校）

《コラム》